初期クメール複合寺院, プラサート・サンボーの改変 ALTERATION OF AN EARLY KHMER TEMPLE COMPLEX, PRASAT SAMBOR

下田 一太*, 中川 武**
Ichita SHIMODA and Takeshi NAKAGAWA

Prasat Sambor is one of the main temple complex in the Khmer ancient city, *Isanapura*. Two different periods of inscriptions that indicate 7th and 10th century have been confirmed in this temple up to now. In addition, previous studies on the style of stone sculptures, architectural decorative elements and excavated artifacts also interpreted the various date from 7th century when it was constructed at earliest stage to late Angkor period. By the recent archaeological excavation survey, many alteration traces of the buildings were recognized. Especially, there are double structures were found under the east gate of middle enclosure, and original temple design was conjectured different from final phase. This paper discussed on the transition of the alteration of this temple complex.

Keywords: Cambodia, Khmer, Pre Angkor, Sambor Prei Kuk, Isanapura

カンボジア, クメール, プレアンコール, サンボー・プレイ・クック, イーシャナプラ

1. はじめに

カンボジアの国土のほぼ中央に位置するサンボー・プレイ・クック遺跡群 (Sambor Prei Kuk) は, アンコール王朝の前身国家であるチェンラ王朝の首都, イーシャナプラ (Īṣānapura) に比定されており, 7世紀初頭に創建された多数の煉瓦造寺院や都城址が含まれる。中でも, プラサート・イエー・ポアン (Prasat Yeai Poeun) とプラサート・サンボー (Prasat Sambor) は, それまでのクメール建築と比して, 飛躍的な伽藍配置構成の発展を遂げ, アンコール時代に一般化する複合的な伽藍形式の萌芽をなす寺院として注目される。

これらの寺院はアンコール王朝が創設された9世紀以降にも, 放置されることなく「生きた」寺院として長期間にわたり利用され続けたことが過去の研究によって指摘されている。遺跡群東方の寺院が集中する地区の南側に位置するプラサート・イエー・ポアンでは, 過去にフランス極東学院の研究者らにより, 伽藍内の発掘調査が行われた。寺院内のある祠堂からは, 西暦627年にリングが奉納された, という実年代を含む碑文が発見された他, イーシャナヴァルマン (Īśānavarman) 一世の治世期 (616-635?) の碑文が複数出土している。こうした建立当初のものと考えられる碑文の発見と同時に, 10~11世紀の作品と推測されるガネーシャ像や, さらに時代が下ってバイヨン期の神像も併せて出土している¹⁾。

一方, 寺院集中地区の北側に位置するプラサート・サンボーでもまた, 碑文学者フィノ (L. Finot) が指摘するように, そこには確かに7世紀と10世紀の「二つの時代」の痕跡が併存する²⁾。碑文史料に基づく年代観に限らず, この寺院から発見された彫刻作品の美術様式や, 発掘の出土品に含まれる中国産陶磁器等にも, 建立当初の7世

紀とは異なる時代を示す遺物が含まれている³⁾。こうした事実と符合するように, 近年プラサート・サンボーにおいて実施した発掘調査からは, 建築遺構の増改築の痕跡が複数確認された。

本稿は, こうしたプラサート・サンボーにみられる年代指標となりうる史的痕跡を整理した上で, 2001年以降に実施した発掘調査⁴⁾により確認された遺構の改変痕から, 伽藍増改築の推移の一端を明らかにしようとするものである。

2. プラサート・サンボーの伽藍配置構成

プラサート・サンボーは二重の周壁に圍繞された寺院としてこれまで認識されてきたが, 最近の調査により, 外側にさらにもう一重の周壁が存在した痕跡が発見され, 主祠堂を中心として, 複数の祠堂を布置し, 三重の周壁に圍繞された伽藍配置構成をなしていたことが明らかになっている⁵⁾。最外郭の外周壁は一辺約389mの方形平面を囲い, さらにその周囲には環濠らしき起伏も認められ⁶⁾, 遺跡群の中でも最も大きな寺域を有する。

本稿では, 三重の周壁を外から内に向かって外周壁, 中周壁, そして内周壁と称するが, それらの周壁の配置は, 典型的なクメール寺院とは異なっている。つまり, クメールの複合寺院では, 主祠堂を矩形の周壁に圍繞された敷地のほぼ中心か, 後方に配しているのが一般的であるのに対して, 本伽藍では主祠堂を中心に配する内周壁が中周壁内において前方, つまり東方に偏っている上, 中周壁は外周壁の中心から大きく南東方向に偏位している (図1)。このように, 外周壁が伽藍を北西側に大きく広げるように配置されているのは, 寺院の東側に迫る河川の氾濫原や, 既存の周辺寺院の敷地を

* 早稲田大学理工学術院総合研究所 講師・工修

** 早稲田大学理工学術院 教授・工博

Visiting Assistant Prof., Advanced Research Institute for Science and Engineering, Waseda University, M. Eng.
Prof., School of Science and Engineering, Waseda University, Dr. Eng.

避けるように、後世に伽藍が拡張されたためであったものと推測され、後述する発掘調査により明らかとなった外周壁の後補に関する推測とも合致する。

また、中周壁を含むその内側の各祠堂や周壁は極めて高い精度で四方対称に配置されているにもかかわらず、外周壁の平面には歪みがみられ、測量配置や施工精度が劣っていることも、外周壁が後世になってから増築され、伽藍規模が拡張されたことを示唆するものと考えられる。

3. プラサート・サンボーの年代観

クメール建築の年代考察には、碑文史料や、建築や彫刻装飾の様式編年、出土遺物の年代判定などが有用であるが、プラサート・サンボーにおける従来の研究では、そうした年代推定要素のいずれもが、プレ・アンコール時代に限らず、より広い時代的分布を示している。以下に、最近の発掘調査による新たな知見を交えて、それらを整理したい。

3.1 碑文史料にみられる年代

遺跡群全域でこれまでに確認されている碑文は合計24点に上る。うち21点はルクレール (A. Leclère)、ラジョンキエール (E. L. de Lajonquiere)、モーラン (G. Morand)、パルマンティエ (H. Parmentier)、そしてゴルベウ (V. Goloubew) によって19世紀末から20世紀前半に発見された碑文であり、残り3点は1998年以降に我々の調査により発見されたものである。それらのうち、実年代を記しているものはわずかに3点のみで、最古のものは、遺跡群北方に位置するスレイ・クルップ・リアク (Srei Krup Leak) 寺院群から出土した碑文K.151⁷⁾であり、598年を刻む。続いて、プラサート・イエイ・ポアンから出土した627年の碑文K.604⁸⁾、そして北方に位置するローバン・ロミナス (Robang Romeas) 寺院群の碑文K.153⁹⁾に記された1001年が最も新しい。これら以外の碑文についても、記された王名等からその大半は時代推定が可能である。

プラサート・サンボーの寺域内からは、5点の碑文が発見されて

いる。N15塔のK.148碑文、N18塔のK.149碑文、中周壁の東門であるN25塔のK.436碑文、N14-1塔のK.437碑文、そしてN16塔 (N16-1塔とN16-2塔のどちらかは不明) のK.438碑文である。これらの碑文のうち、K.149、K.437、K.438はイーシャナヴァルマン一世の名を記しており、彼の治世期である7世紀初頭の碑文であると考えられている。他方、K.148とK.436は10世紀の碑文に比定されている。

これらの碑文と漢籍史料の記述から、当寺院は建立当初の時点ではBhadreçvara神を祀っていた可能性が高いこと¹⁰⁾、また10世紀に入ると、ラージェンドラヴァルマン (Rajendravarman) 二世によりGambhireçvara神を主尊とした寺院に改宗されたことが推測されている¹¹⁾。

ここに示された両神格は、シヴァ派の尊格であるが、初代の主尊Bhadreçvara神はプレ・アンコール期に広く流布した守護神として知られている。近年実施した主祠堂内外の考古学的調査からも、プラサート・サンボーがシヴァ教の寺院であったことを裏付ける遺物が確認された。主祠堂の周囲のクリアランス調査と、主祠堂内部の発掘調査によって出土した砂岩片を繋ぎ合わせたところ、一辺2.7mの方形台座が復元され、出土地点とその規模から、当初は主祠堂内に配されていた台座であることが推測された。この台座の中央には、直径1.2mの円形の柄穴が穿たれており、ここにはシヴァ信仰の象徴であるリングが据えられていたものと推測されるのである¹²⁾。

例えば、アンコール期初頭の寺院であるブノン・ボックには直径1.3m、長さ4mにも及ぶリングが残されているが、この祠堂内にも同等の規模と威容を誇るリングが安置されていた様子を偲ぶこともできる。はたして、10世紀におきた同じシヴァ派間での改修の際に、リングの据え換えが生じたかどうかは定かではないが、このリングの受け穴が穿たれた台座の発見は、寺院の主尊であるBhadreçvara神ならびにGambhireçvara神の象徴をなすリングが、寺院の主祠堂に祀られていたことを示唆するものである。

3.2 彫像の様式にみられる年代観

寺院の各祠堂内には、当初、神像が安置されていたものと考えられるが、残念ながらその大半は遺失している。当遺跡群から発見された彫像は4体にすぎないが、それらはいずれもプラサート・サンボーから発見されたものである。碑文史料と同じく、それら彫像の美術様式もまた、7世紀と10世紀の二つの時代を示している。

ハリハラ (Harihara) 神像は、プラサート・サンボーの副祠堂であるN10塔と、当寺院群の北東に位置するサンボー村の精霊信仰の祠の二箇所から、50以上の小片となって破壊された状態で発見された¹³⁾。現在、この彫像は修復されて、ブノンベン国立博物館に展示されているが、彫像を支持する柄の形状と、N10塔の室内に残存する台座上面の柄穴の形状とが一致したことより、原位置はN10塔であったことが確認された。この彫像は美術様式の編年に基づき、7世紀前半のサンボー様式に分類されている¹⁴⁾。

ドゥルガー (Durga) 神像もまた、主祠堂であるN1塔と、副祠堂N9塔の二箇所から破壊された各部が発見されている。プレ・アンコール期の女神像を代表する作品で、頭と両手を欠くトルソーの彫像である。N1塔から彫像の一部が発見されたのが、N9塔における発見よりも約半世紀先行したため、長きに渡り、この彫像はN1塔に安置されていたものと考えられていた。しかしながら、前述の通りN1塔

図1 プラサート・サンボー寺院配置図

内に円形の穴が穿たれた大型の台座が発見されたため、等身大規模のドゥルガー神像が、ここに安置されていた可能性はほぼ否定されることとなった。一方、N9塔室内にドゥルガー神像を安置していた台座は残っておらず、2005年に実施した塔内の発掘調査からも、台座片は一切検出されなかった。N9塔以外の他の祠堂内において、近年復元されたいずれの台座¹⁵⁾の柄穴もまた、ドゥルガー神像のものとは一致しないため、ドゥルガー神像の一部が発見されたN9塔が原位置であった可能性は高い。ドゥルガー神像も美術様式の編年によりサンボー様式に分類されている¹⁶⁾。

N22塔の付近からはブラフマー（Brahma）神像が発見されている。この神像は、脚部を紛失しているために、台座の柄穴との照合は不可能であるが、塔内に確認されている二組の台座はいずれも小型のものであり¹⁷⁾、ブラフマー神像もまた小振りであることから、これらの台座に安置されていたことが推測される。この彫像はプレ・アンコール期の一様式であるプレイ・クメン様式に分類されている¹⁸⁾。ただし、彫像そのものの様式編年によるものではなく、後述する同塔のリンテル装飾の様式編年に彫像の編年が依拠するものであることに注意を要する。

これら3体のサンボー様式の神像に加えて、2005年に発掘調査を実施したN14-2塔の室内からは、完形のリング・ヨーニの御神体が出土した。ここで発見されたリングは、先太りの砲弾型をしたものであり、アンコール期に典型的なリングとは異なる。当遺跡群からは、他にもこの形式のリングが数点発見されており、プレ・アンコール期に特有の様式であると考えられているが、こうして台座と対になる出土例は初めてである。リングを類型学的に整理した様式編年は十分に確立されていないが、これがプレ・アンコール期の安置物であることはほぼ明らかである。

このように、点数は限られているものの、プレ・アンコール期、中でもサンボー様式に分類される彫像が、発見された神像の大半を占める中で、副祠堂であるN7塔室内から発見されたとされるヴァジムカ（Vajimukha）神像は、10世紀、アンコール時代のプレ・ルプ様式を示している¹⁹⁾。台座は円形の砂岩材5層積みよりなり、最下層は直径3.13mの大型の石材からなる²⁰⁾。この台座の最上層には安置されていた彫像を支えるための柄穴が穿たれているが、現在、パリのギメ博物館に展示されているこの彫像は、足回りが欠損しており、台座の柄穴との照合は今となっては不可能であるため、厳密にはこの神像の原位置がN7塔であったことについては疑問符が残されている。

3.3 リンテル装飾の美術様式にもとづく編年

リンテル装飾は、クメール建築の様式編年において最も有用な建築部位の一つである。当寺院からは、N7塔、N11塔、N14-1塔、N14-2塔、N15塔、N22塔、N25塔の計7点のリンテルが確認されている。

これらのうち、原位置に残存するものはN22塔のみである。N11塔のリンテルは古写真と現場倉庫に収蔵されているリンテルの照合により明らかになったもの、N15塔のリンテルは既に剥奪されてしまったが古写真に記録されているもの、その他のリンテルは最近の調査で新たに発見されたものである。また、これらのリンテルのうち、N7塔、N11塔、N14-1塔、N14-2塔、N15塔のものはサンボー様式

に分類される。

N22塔のリンテルはプレイ・クメン様式に分類される。プレイ・クメン様式はサンボー様式にやや遅れて生じた様式であるものの、重複する時代を長く有することから、この様式の別を根拠に、N22塔が他の塔より後に建造されたとは、必ずしも断言できない。とはいえ、この祠堂が伽藍内でも孤立して配置されていることから、建造に時間差があった可能性は指摘しうる。

最近の調査で発見された、中周壁東門のN25塔のリンテルは、未完成であると思われるが、プレ・アンコール期の様式を示すリンテルへと彫り進めるための、彫刻加工の一過程で放置されたものとは考えがたい。プレイ・クメン様式とアーチの曲線が類似しているが、アーチ上方に残された彫刻面がいささか狭すぎるように思われる。いずれにせよ、この寺院から発見されている他のリンテルとは異なる様式を示しており、後世の作である可能性が高い。リンテルと併せてN25塔付近より出土したコロネットは、円柱形で装飾彫刻はプレ・アンコール期の特徴を示しているため、このリンテルの製作時代とは隔たりがあると考えられる。なお、ここN25塔は10世紀の碑文K.436が刻まれた扉縦枠材が出土した遺構であり、リンテルが後世の作である可能性と呼応していることに留意されたい。

3.4 過去の発掘遺物にみられる年代観

遺跡群における初めての本格的な考古学的発掘調査は、ゴルベウの指揮の下、プラサート・イエイ・ポアンにおいて1927年に実施されたものである。この考古学的発掘調査により、碑文が刻まれた扉枠、リンテル、台座、陶器、陶磁器等の他、前述したアンコール期のガルダに跨る男性像やテラコッタ製のガネーシャが発見された²¹⁾。

その後、1961年1月から2月にかけて、グロリエ（B. P. Groslier）による発掘調査が行われた。このときの調査は報告がないが、非公式の文書記録と図面、写真が残されている²²⁾。特にプラサート・サンボーとプラサート・イエイ・ポアンの両寺院間で多数の遺物が出土したため、この区域で集中的な調査が展開された。

グロリエはこの時に発見された陶磁器に関するまとまった報告を残さなかったが、彼が残したクメール陶器に関する概説書の中で、この発掘調査で出土した陶器について解説が加えられている²³⁾。この時の出土遺物の中でも年代判定の指標となりうる中国産陶磁器を対象に再調査を実施した²⁴⁾。中でも年代判定を細分化しうる白磁・青磁の碗や皿は8世紀後半の晩唐にさかのぼる可能性があるものから14世紀後半の元代にまで至る陶磁が連綿と続いていることが確認された。特に11世紀後半以降のものが急増する傾向が見られる。中国陶磁器が主力貿易品として対外輸出されるのは8世紀後半以降のことであり、これ以前には中国陶磁のアジア出土例は稀少であるため、中国陶磁を指標に年代の上限を考察することは難しいが、寺院区の施設が少なくとも14世紀後半まで存続していることが窺われる結果が得られた。

このように、当寺院からは7世紀と10世紀の両時代を示唆する碑文や彫像が出土しているほか、中国陶磁も8世紀後半から14世紀後半までの長期に渡る年代が認められたことになる。以下に、こうした長期継続の事実と整合しうる、発掘調査による出土遺構の改変の様子を示したい。

4. 発掘調査により確認された改変の痕跡

4.1 N1塔の改変

2001年にブラサート・サンポーの主祠堂（N1塔）周辺の堆積土砂のクリアランスを行った²⁵⁾。壁体の半ばまで堆積していた崩落煉瓦や土砂を除去した結果、祠堂の一部が改変されていた痕跡が明らかとなった²⁶⁾。改変は前身遺構の基壇部と付柱を一回り拡張したものである。ここでは後補の煉瓦積みを前身遺構にしっかりと接合させるために、前身遺構の煉瓦面を削り取り、そこに新たな煉瓦をはめ込んで後補の煉瓦を組積する仕事が看取される。同様の痕跡がN7塔でも認められるが、この塔は前述のようにプレ・ルブ様式の彫像であるヴァジムカ神像が安置されていた祠堂であり、後年に手が加えられた痕跡が他にも認められることに留意されたい。

同時に破風飾り以上の建物上部をそっくり積み換えた可能性も窺われた。というのも、現在、祠堂の屋蓋部は全壊しているが、崩落部が階段状に整った面をなしており、過去に人為的に屋蓋部を取り除いて、煉瓦を組積しなおした部分が滑り面となって崩落を促していることが看取されるためである。

また、クリアランスにより建物の外壁面には一部で漆喰が残されている事も確認された。漆喰は約10cmの厚さで塗り上げられているが、煉瓦の壁面に施されているフライングパレスやモールディングなどの装飾は、漆喰仕上げにより覆い隠されてしまったであろうことが推測される。例えば、ブラサート・イエイ・ポアンS10塔のフライングパレスでは、煉瓦面の彫刻は漆喰仕上げ前の粗加工となる下作業であったことが窺われる一方、N21塔のフライングパレスでは、煉瓦面での彫刻装飾と漆喰装飾とはデザインが異なっており、後世にモチーフが改変されたことが明らかである。ここ、ブラサート・サンポーの祠堂では、確かな判断材料を欠くものの、煉瓦面での彫刻の完成度が高いことから、漆喰による仕上げもまた後世の改変時の仕事であったものと推測される。

4.2 内周壁東門とその周囲の改変

2004年から2006年にかけて、寺院内において二列のトレンチによる発掘調査を実施した(図2)。いずれも伽藍の東西主軸方向と平行するもので、一本は主軸から20m北側に、もう一本は主軸線上を南壁とする発掘トレンチである。伽藍内は主要な煉瓦造寺院を除いては、周壁等も含めてその大半はいずれも堆積土に埋没しており、当初の伽藍内の構成は殆ど判らない状況であった。こうした中、北列の発掘トレンチでは、中央テラス・内周壁・中央テラスと内周壁間・中周壁を対象に調査を行った。中心軸上での調査は、内周壁の東門・中周壁の東門・周壁と中周壁間・周壁の東辺中央のテラスを調査の対象とした。

内周壁の西門では、過去にパルマンティエにより調査が行われており、立面図が残されている²⁷⁾。今回の調査で確認された東門は、パルマンティエの報告による西門の立面構成と類似しているものの、一部には異なる点も見うけられた(図3)。低い連子子を連ねた立面で、アンコール期のクメール建築には見られない独特の形式を示すものである。東門の直ぐ脇の石板には格子状の花弁紋様が、また水平長手の砂岩材を支える束状の砂岩材にも、植物紋様が彫り込まれているが、これらの装飾は、他の祠堂の台座の彫刻装飾と酷似しており、建造当初に内周壁も併せて建設されたことは明らかである。

東門の内外では煉瓦敷きの床面が検出された。門の外側では、中心軸から1.8mの幅で煉瓦敷きを確認されたため、内・中周壁の東門を連結するように全幅3.6mの煉瓦敷きが参道状に延びていた様子が復元される。

一方、内周壁内の敷地では、中央テラスの北東隅周辺のA-05とB-05エリアの発掘調査により、ほぼ全面に煉瓦敷きの床面が広がっていた様子が推測された。床面はテラスの裾から約3.5mまでは完形の煉瓦を対にして、縦横に直交するように丁寧に敷き詰められてい

図2 発掘調査エリア

るが、その外側では完形の煉瓦は殆ど認められず、半分ほどの大きさの煉瓦を不規則に敷き詰めた、粗い仕事となる。また、周壁の直ぐ内側約1mの幅では、テラス周辺と同様に丁寧に煉瓦を敷き詰めた床面が検出されたため、内周壁の内側には回廊状の歩面が周回していた可能性が窺われた。

内周壁東門の外側に参道上の遺構が延びているのに対して、その内側では、門の開口幅とほぼ同寸、つまり約2.8m幅でのみ煉瓦敷きが出土した。ただし、この床面の北端は直線状に整えられていないことから、当初、床面は周囲一面に広がっていたところを後世に取り壊して、主軸上の床面だけを参道状に残したものと推測される。

こうした各建物間を連結する遺構が、内周壁内からは他にも見つ
かっている。B-05トレンチでは、南北に走っているものと考えられ
る周囲の床面から30cm程高く持ち上げられた幅6mの煉瓦遺構が検
出された。ちょうどN9塔への正面に位置しているため、N9塔へア
クセスする通廊であったものと推測される。この通廊は、参拝者
が歩く舗面となるにもかかわらず、周囲の床面と比べて大変粗
い煉瓦敷きであることから、建立当初に造られたものとは考えに
くい。また、この通廊上の一部を掘り下げたところ、周囲の床面と
ほぼ同レベルで部分的に煉瓦材が検出された。つまり、一面に煉
瓦敷きであった当初の床面上に通廊を増築した際に、大半の煉瓦は
除去されたものの、一部が取り残され、それが出土したものと考え
られる。こうしたことから、この通廊遺構は後補のものである可能
性が窺われる。

内周壁東門付近では現地表面の約2m下方から、当初遺構となる煉瓦敷きの床面が検出されたが、その上層には複数の後補遺構が積み重なるようにして確認された。それらの遺構は、前身の遺構を取り壊したり、あるいはそのまま上に重ねるようにして建造されていた。また、再利用の煉瓦を外装材として、その内部は煉瓦の端材を混ぜた土砂を締め固めただけの粗雑な造りであるため、それらの増改築の経過を子細に把握するのは困難である。こうした出土状況ではあるが、あえて東門周辺における改変の過程を追うと次のようになる。

最初の改変は小規模なもので、東門のすぐ内側に煉瓦列によって縁取りし、その内部に盛土されたステップが増築された。

その後、東門の内側の床面を主軸上を除いて剥ぎ取ることで参道状にし、さらにこの参道脇に煉瓦片を混入した土で突き固めた、大変堅固ではあるが粗雑な造りの、背の低い遺構が敷設されたようである。この遺構は崩壊および変形が著しく、把握は困難だが、東門のすぐ内側に4m程の規模を持つ建物と、50cm程の隙間をあけてさらに西側に配置された別の建物があったようである。

これと前後して、東門内外の参道状遺構の脇には、直径1mの大穴

が掘り込まれた。東門から内側に2m、外側には隣接して、この大穴は位置している。煉瓦敷き直下の基礎構造も掘り抜かれており、穴はかなりの深さに達するようであるが、穴の底のレベルは正確には確認されなかった。門全体に覆屋を後補した際の柱穴であったとみることもできようが、直径1mという規模に見合う構造を復元するのは困難であり、この穴の機能は定かではない。

さらにこれらの増改築と前後して、内周壁の外面に周回するようにして取り付く、厚さ80cmの遺構が増築された。これもまた煉瓦とラテライト片を混入した土を突き固めて、外装面のみを再利用煉瓦で粗く積み上げた造りであり、周壁とほぼ同等の高さに築かれている。周壁の外面に彫刻されていた彫刻装飾は、これによって覆い隠されることになった。この改変とおそらく同時に、東門を内側から封鎖する遺構が増築されたようである。門の敷居の上端より約50cm上に、この遺構の上面をなす煉瓦積みが確認されている。こうした増築は伽藍の最内核を防衛する必要に駆られて付設された構造物であるように推察されるが、そうした歴史的背景がこれまでに指摘されたことはなく、慎重な考察を要する。

こうした増改築の遺構の上層には、さらに内周壁内外を覆う煉瓦の薄い層が認められる。この層位は水平には展開しておらず、東門の付近でやや盛り上がっている。一部には煉瓦が規則的に敷き詰められている箇所が認められることから、これもまた人工的な遺構であるようだが、この段階に至っては、地均しもされることなく、ただ煉瓦を敷き詰めるだけの、もはや些末な整備に過ぎないものであった。

4.3 中周壁の改変

中周壁はラテライト造によるもので、各所とも崩壊が著しく、建物上部の原型を留めているところは皆無である。ラテライトを外装材としているが、その内部はラテライト片を詰め込んだだけの粗い造りである。中周壁の東門からは、前述の通り10世紀の碑文K.436と、未完成で製作時代不詳のリンテルが出土している。遺構の大半が土砂に埋没していた東門およびその周辺と（発掘エリアI-06）、東門から20m北側の周壁部分（発掘エリアE-05）で発掘調査を行い、中周壁の構成を明らかにすると共に、門と周壁内外に近接して縦穴を掘り下げ、その基礎構造の把握を図った。

その結果、周壁内外の縦穴からは、周壁の床面下3.5mの深さに達するまで、基礎構造が連続して確認された。図4は東門の中心軸から北側に4m、東門と周壁の接合部で周壁内外を掘り下げた土層断面図、図5は中心軸から20m北側での土層断面図である。いずれの地点からも地表に一部露出している周壁築造時の床面レベルから、深さ約3.5mの地山面に至るまで、変化に富んだ構造が確認された。両地点共に周壁の内外で構造が大きく異なっているが、16m離れた双

図3 内周壁東門、東立面復元図と断面図

方の層序は一部を除いてほぼ共通している。

東門付近の周壁直下と周壁内外の層序を表1～3に示す。

表1) 周壁直下の構造

第a1層	0-60cm	ラテライト材による基礎構造。壁体の外壁よりも形状が不揃いで粗い仕上げのラテライトが使用される
第a2層	60-85cm	煉瓦チップの混入した堅く締まった土層
第a3層	85-105cm	少量の煉瓦チップの混入した堅く締まった土層
第a4層	105-190cm	未加工の砂岩積み層
第a5層	190-330cm	未加工のラテライトを密実に積み積み上げた層
第a6層	330cm-	地山層

表2) 周壁外側の土層断面

第b1層	床面上	表層の自然堆積土層
第b2層	床面上	周壁の崩落ラテライトが多く混入する堆積層
第b3層	床	煉瓦の端材を多量に混入した土層。最終期の東門周囲の床面をなしていたものと考えられる
第b4層	0-55cm	炭化物と一部に少量の煉瓦チップが混入した土層
第b5層	55-85cm	煉瓦チップの混入した大変堅く締まった土層(第a2層と同じ)
第b6層	85-180cm	少量の煉瓦チップが混入した堅く締まった土層。3つに分層され、第二層は黒い斑点が混ざり、第三層はやや締まりが緩くなる。
第b7層	180-195cm	煉瓦の端材を多量に混入する層
第b8層	195-330cm	未加工のラテライトを密実に積み上げた層(第a5層と同じ)
第b9層	330cm-	地山層

表3) 周壁内側の土層断面

第c1層	床面上	表層の自然堆積土層
第c2層	床面上	自然堆積土層
第c3層	床面上	周壁の崩落ラテライトが多く混入する堆積層
第c4層	床面上	東門の上部構造の崩落前に堆積したものと推測される、少量の煉瓦片とラテライト片、土器片が検出された土層
第c5層	床面上	煉瓦片と煉瓦チップが混入した土層
第c6層	床	煉瓦の端材を多量に混入する層。最終期の東門周囲の床面をなしていたものと考えられる
第c7層	35-80cm	大変堅く締まった土層
第c8層	80-115cm	煉瓦片を混入する堅く締まった土層
第c9層	115cm-	直径 30cm 程の丸石を少数含む白い砂層

東門から20m北側の周壁内外を横断する発掘エリアからも、東門付近と同様の基礎構造が確認されたが、以下に両地点間で異なる点のみを略記する。

東門の遺構直下では、ラテライトのサイズが大きくほぼ上部遺構と同じサイズであるのに対して(a1層)、北側の周壁直下では拳大程の小型のラテライトが使用されている(d1層)。逆に下方の層から検出された砂岩層の各部材は東門直下の方がやや小さく(a4層)、北側周壁下では長さ70cm以上と大材が利用されている(d4層)。しかし、そうした小異に拘泥しなければ、20m離れた両地点間での遺構直下

図4 中周壁内外の土層断面図（東門北側近傍）

の構造はほぼ同じであると考えて良い。

周壁外側の地下構造における両地点間では、東門の付近では床面直下に煉瓦チップが混入する土層(b4層)が認められるのに対して、北側の周壁ではラテライトチップを混入する層(e4層)となっている点に相違が認められる。また、東門の床面下85-180cmでは煉瓦チップ混じりの土層(b6層)が検出されたのに対して、周壁の床面下80-160cmからは頭大のラテライト部材を密実に積み上げた層(e5層)が検出された。また、その下層でも東門は床面下180-195cmにおいて煉瓦の端材が多量に混入した土層(b7層)により版築されているのに対して、周壁の床面下160-180cmでは煉瓦の端材は含まれていない土層であった(e6層)。このように、周壁の外側の地下構造は20m離れた両地点間ではやや異なっている。

いずれにせよ、3m以上の厚さにおよぶこうした建材の変化に富んだ基礎構造が、現存するラテライト造の中周壁を支持するためだけの仕事であったとはいささか考えがたい。特に、地下の組積構造としてラテライトと砂岩を使い分けしているのは同一の基礎構造としては不自然である。こうした数種の構造を積み重ねていることに対する解釈として、床面を嵩上げてゆく増改築の過程を推測するのは、一つの妥当な見解であると考えられる。周壁内側の縦穴は十分に掘り下げていないために、周壁内外での横断的な関係を把握することが難しいが、ここには二回の改変を推定することができる。

東門直下でこれを示すならば、第一期は砂岩の石積みであるa4層が上部遺構の基壇となる段階で、この組積の足下とレベルをあわせたb7層が周囲の床面をなす。a5層とb8層、またd5層とe7層はそれぞれ連続的な土層であり建物直下とその周囲とは連続的な地業となっている。第二期はa2層とb5層が床面をなす時期である。周壁北側では層の構造は異なるが、ラテライト積みの上端面にあたるd2層とe5層とがこれに対応する。a2層とb5層、またd2層とe5層はいずれも連続的な層となってほぼ平滑な床面を造っている。第三期は地上に一部露出して現存するラテライト造による周壁の構築段階であり、b3層とc5層が周囲の床面をなしていた。北側でも同様にe3層とf4層とが周囲の床面をなしている。

周壁の内側では、外側と同位まで深く掘り下げていないため、

図5 中周壁内外の土層断面図（伽藍の主軸線から北へ20m）

周壁直下とその内側の層位関係を特にその初期の段階となる深層部で十分に把握できておらず、今後の課題となっている。

第一、第二期における上部建築の存在については定かではないが、嵩上げを伴う増築時に取り壊されたことが推測される。というのも、現存する最上層の遺構、つまり第三期の建築に再利用部材が幾つか混ざっているためである。まず、東門の外側2段目の階段石の踏み面には扉の軸受けの穴が穿たれているが、この位置に扉が嵌め込まれていたことはありえず、これが再利用部材であることは明らかである。また、内側の階段石にも再利用されたことが確実な部材が含まれている。前述したコロネット材がブレアンコール期の様式であるのに対して、リンテルは年代不詳だが、少なくともコロネットと同じ様式のものではなく、より後年の作であることが推測されることは、やはりこのコロネット材が再利用部材であった可能性を示唆している。

現存する東門が第三期目の遺構であるとすれば、この扉枠の碑文に記された10世紀という年代は、第三期となる改変の時代を示していると考えうる証左となろう。

4.4 内—中周壁間の参道の改変

内周壁と中周壁それぞれの東門の間には、断続的に7つのトレンチ(B-06～H-06)を設定した。トレンチからは地下30cmの深さから煉瓦敷きの煉瓦の端材を乱雑に並べた粗い仕事による床面が検出された。この床面の煉瓦を取り外して掘り下げたところ、さらに30cm下方からもう一層別の煉瓦敷きの床面が検出された。下層の床面は上層のそれよりも仕事が丁寧であり、使用されている煉瓦も整っていた。中周壁東門の西側の階段では、下層の床面をなす煉瓦敷きが、階段石の上に乗り上げるように敷き詰められており、この床面の下方より中周壁の二段の階段石とムーンストーンとが検出された(図6)。これより、最終段階となる中周壁の東門が建造された後に下層の床面が構築され、またさらに時代が下って、上層の床面が敷設されたことが明らかである。

この煉瓦敷きの広がりを知るために、F-07トレンチの東端1mを北側に拡張したところ、主軸線より約1.8mで煉瓦敷きが途絶えた。よって、主軸線を介して幅3.6mの煉瓦敷きであることが推測され、内—外周壁東門間を連結する参道状の遺構であることが判明した。また、この遺構の側面を掘り下げたところ、上層の煉瓦敷きの舗面は、煉瓦積みによって60cmほど持ち上げられて、周囲からは一段高くなっていることが確認された。

図6 中周壁東門の断面図(伽藍の主軸線上)

4.5 階段状テラス

外周壁の大半は崩壊が著しく、断続的にラテライト列が残存しているに過ぎない。西辺と伽藍の東西主軸線との交点(N36)、および南辺と主祠堂を通り主軸に直行する軸線との交点(N35)には煉瓦造遺構の痕跡が認められ、扉周りを構成する砂岩部材も幾つか周囲には散乱しているため、外周壁の西門および南門をなす遺構の痕跡であると推測される(図1)。今回発掘調査を行った外周壁東辺の中心軸線上付近には、未加工の大型砂岩材が一部で地上に露出していた。ここから東方には、約1.8kmにおよぶ土堤状の参道が延びている。

地上に露出していた砂岩材の周囲(J-06)を発掘調査したところ、階段状に石材を敷き詰めた遺構が検出された。精霊神を祀る祠がこの発掘エリアのすぐ北側に建てられており、そちら側への拡張は控えたために全体の平面構成は不明であるが、東西に12m、中心軸に対して対称形の平面計画であれば南北に約10mの平面規模であったとものと推測される。

砂岩は未加工であるが、板状で長材が多い。参拝者のアプローチの方向に直交するように、部材は長手を南北に用いている。西側に向けて徐々に上ってゆくように階段状に部材が配されており、東西両端で約90cmの比高となる。石材のサイズは多様であるが、大きいものでは長さ3m以上のものも含まれ、基本的に中心軸線上に大型の石材が使用される傾向がみられる。

この階段テラス状の遺構の西端レベルは、中周壁東側の階段最下段に配されるムーンストーンのレベルよりも約1m下がっている(図7)。このレベル差が中—外周壁間でどのように生じているのかは、現時点では両地点間を横断する発掘調査を行っていないために定かではない。テラス東端の最も低いレベルは、中周壁に推測された第一期の床面レベルとほぼ一致し、またテラス西端の最上レベルは、中周壁の第二期床面レベルとやはりほぼ等しい(図7)。よって、中周壁の改変の推移と比較して考えるならば、寺院中央に向かって下るアプローチは想定し難いことから、テラスは中周壁の第一期には存在せず、第二期に建造された可能性が窺われる。また、前述の通り、外周壁の平面配置が方形を指向しているものの、全体として若干の歪みもち、配置計画の精度の低さが窺われる事実も、外周壁およびテラスが寺院建立当初に建造された遺構ではないことを示唆しているものと考えられる。

図7 伽藍東側の主軸線上にみる各遺構のレベル

5. まとめ

発掘調査により、いくつかの改変の痕跡が認められ、7世紀に当寺院が建立された後にも、複数回に及ぶ改変が繰り返された様子が明らかとなった。異なる地点で確認されたそれらの改変の過程を、時系列に並べることは難しいが、出土した遺構の上下関係や、施工精度の経時的な低下といった根拠にもとづき考察するならば、以下に示す伽藍の推移が推定される。

①中周壁を嵩上げる第一回目の改変＋外周壁東中央の階段状テラスの構築、②中周壁を嵩上げる第二回目の改変、③内ー中周壁間の参道下層床面の建設、④内ー中周壁間の参道上層床面の建設、⑤内周壁内側のステップの付設、⑥内周壁内側通廊脇の遺構の増築、⑦内周壁内外の大穴の掘削、⑧内周壁外面に取り付く遺構の増築＋内周壁東門を封鎖する遺構の構築、そして最後に、⑨内周壁周辺を嵩上げる数度におよぶ改変。

これらの伽藍改変において、唯一、絶対的な建造時代の指標を備えているのが、中周壁を嵩上げる第二回目の改変で、扉枠に刻まれたK.436碑文の10世紀という年代である。碑文に記されるように、この時に寺院は改宗され、ヴァジムカ像などの新たな彫像も安置されたようである。ヴァジムカ像が高い芸術的水準を誇っていることから、この時点での建築施工の精度は未だ一定水準を保っていたものと考えられる。これに対して、その後に生じた一連の改変では、仕事の質が大幅に低下している様子が窺える。こうした事実から、アンコール朝の地方拠点として存続していたこの都城は、少なくとも10世紀ごろまでは衛星都市の一つとして重要な位置づけにあったものと推測される。さらに、20世紀初頭に撮影された古写真には寺院内の祠堂にポストアンコール時代の木彫が配されている様子も認められ、アンコール時代が終焉を迎えた後にも、当寺院では時に改変が加えられていたことが推測される。施工精度が著しく低下した増改築の後期の段階は、こうした時代の仕事であったと考えられる。

こうした増改築の痕跡の中でも、伽藍の様相を特に大きく変えたのが、中周壁の嵩上げの改変である。現状では、この寺院は伽藍全体をほぼ水平に展開する構成を呈しているが、この改変に考慮すると、建立当初には中周壁は現存遺構よりも約2m低く位置していたことになり、伽藍全体では周囲が一段低く下がる立面構成であった様子が復元される。現調査段階では、内ー中周壁間でこの段差がどのようにに吸収されているのか、また中ー外周壁間の構造についてなど、今後の追補調査が待たれる点も少なくない。こうした課題は残されているものの、伽藍全体は一段高くなった中央テラスと内ー中周壁間の段差とによって、中心に向かって段台状に持ち上げられていた建立当初の様子が推測され、全体としてさほど大きな高低差はないものの、クメール複合寺院の一型式である堂山型の伽藍構成をなしていた可能性が指摘される。

クメール建築における堂山型寺院のおこりは、8世紀のアク・ヨム（Ak Yum）寺院に求められるのが一般的であるが、この推測からは、その祖型をここブラサート・サンボー寺院にまで遡って位置づけることもできそうである。つまり、最初期のクメール複合寺院にして既に、方形多重の平面や堂山型立面計画といった、後年に大きく展開してゆく、クメール建築独自の伽藍構成の性向が発現していると考えられるのである。伽藍規模に対する調査地区

が限定されている現段階でのこうした仮説に対して、今後も注意深い検証を図りたい。

謝辞

本調査は1998年より開始された早稲田大学理工学部建築史研究室とカンボジア文化芸術省の共同事業であるSambor Prei Kuk Conservation Projectの調査結果の一部である。当事業は、文化財保護・研究助成振興財団と住友財団より助成を受けて行われている。調査はHin Sophorn氏（コンボントム州文化芸術局）、Seng Kompheak氏（シェムリアップ国立博物館）、Chan Vitharong氏（文化芸術省）、So Sokuntheary女史と共同で行ったものである。文献読解においては佐藤桂女史、山崎冬馬氏の協力を得た。以上の方々に、心より感謝申し上げます。

註および参考文献

- 註1) GOLOUBEV, Victor: Chronique: Sambor Prei Kuk, *BEFEO*, 27, pp.489-492, 1927.
- 註2) FINOT, Louis: Notes d'archéologie cambodienne, *BCAI*, pp.184-189, 1912.
- 註3) 1961年に行われた発掘調査による出土品は、現在プノンペン国立博物館に収蔵されている。これらの出土品の再調査を、2007年に山本信夫と嶋本紗枝の協力を得て行った。中国産陶磁に関する所見は山本信夫によりご教示いただいた。
- 註4) 発掘調査はサンボー・ブレイ・クック保全事業により、2004年から2006年にかけて実施したものである。
- 註5) 下田一太、中川武「遺構の分布と都市の中核区 クメール古代都市イーシャナブラの構造に関する研究（その1）」『日本建築学会計画系論文集』602, pp.211-218, 2006.
- 註6) 下田一太他「サンボー・ブレイ・クック遺跡群ブラサート・サンボーにおける発掘調査（2004-2005シーズン）」『東南アジア考古学』26, pp.117-145, 2006.
- 註7) CÉDÈS, George: Etudes Cambodgiennes XXXVI – Quelques précisions sur la fin de Fou-nan, *BEFEO*, 43, pp. 5-8, 1943-1946.
- 註8) CÉDÈS, George: *Inscriptions du Cambodge*, Vol.4, Paris, E. de Boccard (Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3), pp.17-19, 1952.
- 註9) CÉDÈS, George: *Inscriptions du Cambodge*, Vol.5, Paris, E. de Boccard (Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3), pp.194-197, 1953.
- 註10) 金山好男「カンボディア・ブレアンコール期のPura（城市）に就いて」『南方史研究I』pp.3-26, 1959., 下田一太「カンボディア・ブレアンコール期のPura（城市）について 考古学的調査資料にもとづく一考察」東南アジア考古学会『東南アジアの都市と都城II』pp.41-55, 2006.
- 註11) CÉDÈS, George: *Inscriptions du Cambodge*, Vol.4, Paris, E. de Boccard (Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3), pp. 20-24, 33-34, 1952.
- 註12) SHIMODA, Ichita: Frühe Khmer-Tempel und die Symbolik bei der Verehrung der Naturgeister, *Orientierungen*, pp.25-49, 2007.
- 註13) 前掲書註1.
- 註14) DUPONT, Pierre: *La statuaire préankorienne*, Ascona, Artibus Asiae, 15, pp.150-155, 1955.
- 註15) これまでに復元調査を終えた台座は、ブラサート・サンボー内では、N1/N7/N8/N10/N11/N14-2/N22塔である。
- 註16) BOISSELIER, Jean: Une statue féminine inédite du style de Sambor, *Arts Asiatiques*, 2(1), pp.18-34, 1955., Dupont, *op. cit.*, pp.147-155.
- 註17) 一組の台座は過去に室内に散乱していたが、もう一組は2005年に実施した塔内の発掘調査によって発見された。
- 註18) 前掲書註14, pp.156-162.
- 註19) LE BONHER, Albert: Un Siva inédit du style des Khleang, *Arts Asiatiques*, 30, pp.179-204, 1974.
- 註20) N7塔内の台座は2003年から2004年にかけて実施した発掘調査により、遺失部の大半が発見され、復元されている。下田一太他「サンボー・ブレイ・クックN7塔室内の基礎構造 プレ・アンコール期クメール建築の研究（X）」『日本建築学会大会梗概集』pp.533-534, 2004.
- 註21) 前掲書註1, Masson, A: Le dégagement de Sambor Prei Kuk (1927-1929), *Extrême-Asie, Revue indochinoise* 36, pp.535-537, 1927.
- 註22) GROSlier, Bernard-Philippe: *Unpublished material in EFEO*, 1962.
- 註23) GROSlier, Bernard-Philippe: Introduction to the ceramic wares of Angkor, in Khmer Ceramics 9th-14th century, in D. Stock (ed.), *Southeast Asian Ceramics Society*, pp.9-40, 1981.
- 註24) 前掲註3.
- 註25) クリアランスは、国連世界食糧計画によるFood for Workプログラムによる支援事業の一環として地元住民の参加の下に行われた。
- 註26) 下田一太他「サンボー・ブレイ・クックN1塔の改変-プレ・アンコール期クメール建築の研究(VII)」『日本建築学会大会梗概集』pp.161-162, 2003.
- 註27) PARMENTIER, Henri: *L'art khmèr primitif* (2 Vol.), Paris, PEFE0 21-22, p. 359, 1927.

(2007年12月10日原稿受理、2008年3月3日採用決定)